



日本の人口は山を越えたが、国際結婚は増えつつある。日本の人口は、政府の予測を前倒して2004年にピークを迎えたようである。これは、昨年実施した国勢調査の速報値で明らかになった。政府の甘い人口予測は外れ、アトラクターズ・ラボ(株)が2001年に出した2050年に9千万人弱、2100年に3,550万人という厳しい推計が現実的になってきた。

さらに、このほど明らかになった日本人の結婚動向には、晩婚化以外に驚くべくものがある。それは国際結婚の増加である。東京女子医大の先生がまとめた統計によると、2004年の国内外合わせて73万件的婚姻届の中で、国際結婚の数は約6.6%の48,414件になるという。国際結婚した日本人の男女比は2:1と男性が圧倒的に多い。ちなみに政府統計では1970年の国際結婚の総数は5,546件であり、約0.5%でしかなかった。

この内、中国人女性と結婚した男性の約12,200人と米国人男性と結婚した女性の約3,900人がそれぞれの比率としては飛び抜けている。1950年代には、日本人女性が「海を渡る花嫁」として渡米した例が盛んに報道されたものであった。1970年ですら、米国人と結婚した女性は1,571人と国際結婚した女性の46%を占める。

現在は中国やフィリピンから海を渡ってきた女性が、日本人男性と結婚するケースが増えてきている。お互いにことばがあまり通じない状態で、ポンと夫婦という関係に置かれた二人の苦労はたいへんであると思われる。

もちろん、相互の国や第三国で知り合って、紹介や恋愛で結婚した例もたくさんある。筆者の知っているかぎりでは、お互いの努力の結果か、こういったカップルはみんなうまくいっている。

日本の国際企業は国際結婚と同じか

家電や自動車など早くから国際市場や海外生産に打って出た企業では、進出国の法律や習慣との整合が問題となっていた。最近ではその手の問題は、解決方法が知れ渡ったか、日本側が寛容になったか、はたまた珍しいことではなくなったからかわからないが、70年代の終わりに新日鉄が上海の宝山製鉄所に技術協

力したときのような、種々のもめごとはあまり報道されていない。

前世紀末ごろまでは、海外の製造や開発の技術陣を日本へ研修に呼んで、日本式の製造法や設計法の伝授をする企業が多かった。経済産業省の外郭団体(財)海外技術者研修協会(AOTS)は、すでに1959年から海外の技術者の受け入れ研修を政府のODA予算などを使って実施してきている。その実績は2004年度までにアジアを中心に五大大陸12万人強に及んでいる。もちろん、ほかの政府系外郭団体や各海外進出企業が独自に招聘している研修生はさらに多い。

このようにして、海外での技術力と日本語力が上がった結果も寄与したか、日本国内での製造や開発の原価が、海外生産や設計に比べて倍以上に上がるので、国内での業務を積極的に海外に移す企業が増えている。事実、中小企業を含めて海外に製造拠点を置いていない業種は、探すほうが難しいくらいだ。日本国内には、企画と販売および本社機構だけという企業も増えている。

GDPの1/3以上を輸出に依存している中国(日本は約12%)とは逆に、製造と開発のかなりの部分を海外に頼る日本も、同様にいびつな経済構造になったと考えてもよい。互いの愛を確かめるのではない国際結婚と同じような現象である。

日本型技術の国内での伝承が難しくなった

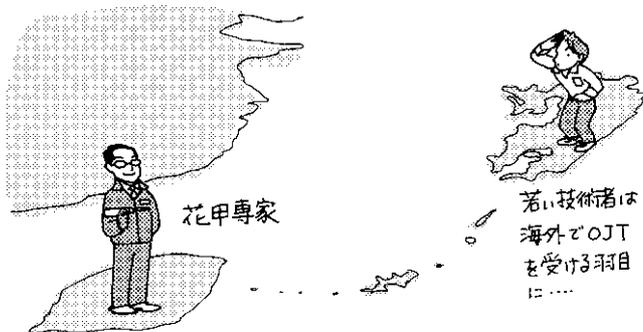
2007年問題として、団塊の世代の大量退職による技術や技能の伝承の危機が喧伝されているが、それ以上に問題なのは、技術の伝承に不可欠なOJT(On the Job Training)を行うための製造や開発の現場が海外に移転してしまっていることである。

卑近な例としては、IBM社がパソコン事業をLenovo社(联想集团:本社北京)に売却した結果、ThinkPadを開発していた日本国内の技術陣は崩壊の危機にある。最終的には中国並みの給料で北京に移るか、ほかの企業に移るかを迫られるかもしれない。元IBM社の技術者が台湾の企業に移って技術開発に従事している、とよく聞く。

米国のように大学が企業と連携して技術開発の主力を担っているような国では、自国内で技術者を育てることも可能であるが、日本のように産業とは一線を画した研究ばかり行っている大学が多いと、それも難しい。

とくに万能技術者を育ててきた中小・零細企業では、客先が海外へ発注し出したのが原因で、製造や開発の受注が極端に減っている。地方の都市に展開していた大企業の工場がどんどん海外に出て行った結果、直接的な雇用だけでなく、工場を技術的に支えてきた中小・零細企業の廃業も進んでいる。

これでは、今後若い技術者が開発技術を身につけるには、まず海外に出かけて、そこにいる日本人技術者が伝承を受けた現地の技術者に学ばざるを得なくなるかもしれない。技術者は英語や中国語を習得しなければならない時代はもう来ている。



技術育成の国際化(“花甲”は還暦, “專家”は専門家のこと)

(key)